「白衣の女」と狂気
――施蟄存の「夜叉」にみる都市表象――

李　征

一、はじめに

中国の近代作家施蟄存の「夜叉」(原題同)という短編小説は、一九三二年十月、上海商務印書館の『東方雑誌』に初めて掲載されたものであった。発表当初の署名は「史存」とあるが、これは、大型文芸誌『現代』の編集長を担当する前後、作家が愛用したペンネームの一つであった。(1)

都市における青年の精神錯乱に焦点を当てており、その精神錯乱の過程を解明してゆくという点からすれば、「夜叉」という小説は、同時期に書かれた「上元灯」(原題同)や「鳩摩羅什」(原題同)、「将軍の頭」(原題「将軍底頭」)などと同系列のものであるといってよい。(2)これらの小説は、ともにフロイト流の精神分析の手法が用いられているため、のちに批評家から総じて心理分析小説と称されている。

これまでの作品のうち、作者自身がとりわけ「夜叉」に対して愛着を抱いているようである。次のことはその一端を示している。「夜叉」が掲載された後、やがてフランス留学中の友人戴望舒から手紙が送られてきた。なかには、目下、中国近代小説をフランス語に翻訳することを企画中だったと語り、さらに、施蟄存の作品もその翻訳対象の一つとして想定され、ただし、どの小説を選んで翻訳すればよいかは、作者のほうで定めていただきたいと依頼するようである。ちなみに、当時、戴望舒はすでに「雨巷」など数多くの近代詩を発表し、中国象徴主義詩人の代表者の一人として活躍しているが、フランス滞在中でも、フランス小説を翻訳したり、あるいは彼地の文学動向を紹介したりして、その多くは施蟄存編集の雑誌『現代』に載せている。上記の翻訳企画はその後、どのような結果になったかは不明であるが、ともかく、当時、施蟄存が選定した作品のリストには、「夜叉」がトップに置かれたことは興味深い。このことと関連して見るべきは、あ

るドイツ人の翻訳者が「夜叉」を一九三二年中国短編小説の代表作の一つとして翻訳したことである。[3]

このようなことからは「夜叉」に対する作家の自負が明らかに読み取れる。それまでの施蟄存の作品名を並べてみればわかるように、かれは最初、写実から創作をはじめたのである。たとえば、「追」(原題同)などには、あきらかにリアリズム的手法が認められる。「上元燈」以来、施蟄存はフロイト流の精神分析手法を作品に取り入れており、様々な表現上の実験を試みたが、とりわけ、「鳩摩羅什」や「将軍の頭」のような歴史題材小説は、豊かな想像力と精緻な心理分析をもって、文壇から高い評価を受けている。これらの小説はいずれも、作家の文壇地位を固めたものといってよいが、それにもかかわらず、作家自身はむしろ、その延長上で書かれた「夜叉」こそが自分の代表作と称しうると披瀝するようである。

一九二〇年代から、三〇年代にかけて、欧米のモダニズム文学思潮が中国の近代文壇にも流れ込んでき、そのため、いかに欧米近代文学の方法を自らの創作に取り入れ、中国のモダニズム文学を確立するか、ということは、中国の近代作家たちにとって大きな課題となっている。このような時代要請に応じて、中国の近代文壇では様々な方法的模索が始まる。このことは、モダン風俗の先端に走る上海の文壇で、とりわけ顕著に認められる。小説「夜叉」は、中国モダニズム文学の成立期に、作家たちの苦闘の様相を記した作品といってよく、それゆえ、作者自身がこの作品に非常に自負を抱いていると考えられよう。施蟄存が「夜叉」に対する愛着は、まず、こうした背景に求められる。

ここで指摘しておきたいのは、「夜叉」のような心理分析小説をとらえるに際して、一九二八年から、施蟄存や戴望舒、劉吶鷗などの若手作家、詩人が結成した文学同人グループの活動も、当然、射程に入れるべきである。というのは、かれらの活動はプロレタリア文学から、シュールレアリズムにまで、きわめて幅広かったが、そのうち、日本新感覚派文学作品が、世界のモダニズム文学の重要な一部として紹介されている。翻訳者は日本留学の体験をもった劉吶鷗であった。かれはたんに翻訳にとどまらず、さらに新感覚派的な表現手法を用いて創作し、中国近代文学史で重要な位置を占める小説集『都市風景線』を出版した。

この時期、劉吶鷗と親交であった施蟄存も、その創作、翻訳に惹かれていると想定される。ただし、日本語がわからないため、かれは多くの場合、劉吶鷗の創作、あるいはその中国語訳のものをとおして、日本新感覚派文学に接触したのであろう。そのため、施蟄存に限らず、一九二〇年代前後、中国の作家たちが都市へと眼を向けることは、日本新感覚派文

学の翻訳・紹介とまったく無関係とは考えられない。たとえば、施蟄存の心理分析小説に現れた登場人物の精神病理は、ほとんど同時期の日本新感覚派文学のなかにも認められる。池谷信三郎の「橋」はその一つの典型としてあげられる。ちなみに、この小説は、一九二八年、劉吶鷗が翻訳した『色情文化』という日本近代小説集に収められており、その影響は後に登場してきた穆時英などの小説家にも及んでいる。

一九二〇年代前後、東アジア地域におけるモダニズム文学の連動の一様相として、都市と狂気の文学的表象はきわめて目立ったものである。これから見てゆく施蟄存「夜叉」と、それに先立った池谷信三郎「橋」などは、その一典型として注目される。二作のうち、「橋」に関する考察はすでに別稿で行われているが。そこでの結論は当然、本稿の論考にも密接関わっているものであり、参照されたい。(4)

以下では、まず日本の読者にはそれほどなじみのない、「夜叉」という作品の内容をおさえながら、そのなかの主要登場人物が狂気に至るまでの心理過程の描写、およびその精神錯乱の心理的要因を分析する。それをふまえて次には、こうした病理の発症が、どのような手法によって、一九二〇年代に入って急激に国際都市化した上海という租界都市とむすびつけられているのか、その小説方法などについて考察してゆく。最後に、同じく精神錯乱を都市の病理としてとらえられる、「橋」と「夜叉」のような作品は、東アジア地域の近代都市文化と関わってみると、どんな異同が認められ、その異同の意味はどうだったかをみることにする。(5)

二、主人公の精神のゆかり――「田園」という場の意味――

「夜叉」という小説における主要登場人物は上海に住む一人の都市生活者で、卞士明と呼ばれる、ある会社の事務員である。作品の構成はいわゆる額縁小説といってよく、その額縁の内容は、おもに主人公卞士明の告白によって語られている。都市から田舎に帰省中、かれは様々な異相を目撃した。こうした出来事は、やがて殺人事件と絡んで展開されており、ついにかれの精神錯乱を引き起こしてゆく。卞士明による第一人称の告白は、小説の叙述量の大半を占めているのだが、ただ、精神錯乱から昏倒して病院にかつぎ込まれるまでの卞士明の狂気の姿態描写は、冒頭と結末の額縁部分に登場する「私」という視点人物の叙述によって補完されている。この点からすれば、「夜叉」という小説は厳密には、第一人称の

告白体小説と同一視することはできない。

小説の冒頭部は、この若い都市生活者卞士明が友人の家で何かのショックを受けて突然昏倒し、友人によって病院にかつぎ込まれるところから始まる。入院した病院を友人が訪れると、ドイツ人の医師から男が精神錯乱に陥っていることを教られる。そこで友人は、本人からその発狂の経緯を聞き出そうとし、それに応ずるかたちで、以後この男の告白が作品の主な内容をなすことになる。

そこで、この男、すなわち卞士明の狂気の告白に入ってゆく前に、まず卞士明自身の素性をこの小説からうかがっておこう。かれはその告白で、田舎への里帰りにふれている。そのことから、この人物が上海という都市の成長・変貌とともに、杭州近郊の田舎（地方）から職を求めて都市に出てきた者であることがわかる。[6] しかしそれ以外については、語り手の「私」の口をとおして、かれが「毎日、事務室での仕事をする以外、いつも運動場でスポーツをしている」と語られるだけで、都市居住者としてのかれについて知られることはない。

そんな卞士明の告白によれば、かれは都市上海に住むようになって、最近ときどき幻覚に悩まされていたようである。かれ自身は、その症状が現われるのは、心身の「健全さ」を維持するために精神抑圧につとめているので、そのせいだと思っている。この告白を契機にして以下では、友人にうながされて卞士明が精神錯乱の原因を告白するとともに、時間を遡行させて、かれに起こったさまざまな出来事、そして、殺人事件が回想されるといった構成をとる。額縁の内部の主人公の告白体形式の叙述は、ここからはじまる。

都市生活に精神的疲労をおぼえていた卞士明は、杭州郊外の故郷の親戚から墓作りの知らせを受けとり、静養をかねる目的で、いまでも親戚関係を大事にしている田舎の実家に帰ることにした。

……私は祖母の葬儀のために杭州に行ったのです。墓は留下鎮の小華山の麓に築かれました。私はそこで墓守をしている親戚の家に泊まることにしました。そこは楊家牌楼と言います。墓作りの仕事は穴掘りから墓の盛り土完成までちょうど半月ほどかかりましたが、しかし、その間、私はちっとも田舎の暮らしに退屈を覚えませんでした。そのあたりはほんとに他人との関係を断って隠れ居むのにいい場所です。墓守の親戚はその山の谷間に住んでいました。周囲には合わせて五軒の家がありますが、親戚の家は東側の端のところに立てられています。門前には竹林が茂ってお

り、その傍らには深い古びた渕があります。しかも家の裏には清い渓流が昼夜を問わずに流れていて、その渓流のせせらぎの音が私の心を喜ばせました。[7]

と語るかれの口振りには、疲れた神経が杭州郊外にある故郷の田舎に帰った途端、すっかり解放されたように感じたことがうかがえる。かれの語る田舎に関する描写はいかにも詳しく、また繊細であったかは注意しておく必要があろう。豊かな自然に包まれた田舎の風景は、卞士明の精神を慰める場所であった。だから、「葬儀が終わっていても、私はあいかわらず上海に戻る気は起こりませんでした」と、主人公は述懐している。

田舎の田園風景を楽しんでいるうちに、かれはどうしても上海に帰りたくないと思うようになり、親戚の家に泊まり続けている。その眼に映る繊細ともいうべき田園風景の描写をもう少しみておこう。

私はわざわざ上海の職場に手紙を送って、さらに十日間の休暇を願い出ました。普段ならいまのように山水を楽しめる機会はそれほどないので、私はなるべくこの機会を利用してもうしばらく田舎で静養しようと思いました。私は西湖図書館から地元の伝説に関する本をたくさん借りて読みました。松木場から留下鎮までの十八里の西溪に沿って、両岸には見物客の好奇心を満たす幽幻奇秘の名勝がいたるところにあります。竹林の落日、山頂の朝日、雨の日山々に纏わりついている煙雲、水辺の烏臼子の木と蘆の花、それに町の朝の魚市場、夕暮れの時、空山の中の樵人が互いに呼ぶ声、月下の清溪と白石、暗夜に遠山の野焼……

この田園の自然を描写する卞士明の語りには、古典（詩）の深い知性からにじみ出たかのようなかれの眼差しが感じられる。それゆえ、このいかにも自然に溶け込んだかのような語りには、たんに田舎の風景を語るというだけでなく、卞士明が古典的な〈知〉を愛する人物であることがうかがえよう。このような風景は幼少期のかれの心を養育するものだっただけでなく、都市に出た今でも、その精神の支柱となっていたとすれば、かれはやはり都市の喧騒のなかにあっても、心のなかで故郷の田園風景を思い描き続けていたのであろうとも考えられる。それに、このような田園風景に溶け込んだ主人公卞士明の個性は、孤独を愛する傾向と言うべく、そこに見られる都市への嫌悪は、前引した箇所の「他人との関係を

断って隠れ居むのにいい場所です」という言葉からもうかがえる。

夜中、一人で眠れない卞士明は、窓から闇のなかの田舎風景を楽しみ、その眼に映る夜景は、あきらかに古典の世界であるとともに、孤独の世界でもあるようにみえる。

私がいま自分の泊まっている楼閣に戻ったとき、もう煙靄が地面から立ち昇って、あたりが朦朧とした夕暮れの時刻でした。ここであなたにぜひとも言っておかなければならないことは、その墓守の、私の親戚は田舎の地主だということです。だから、彼の家は二階建てでとても立派な作りをしています。私は三つの部屋のなかの、もっとも東側にある部屋に泊まっておりました。床、天井、窓いずれも中国産の黒漆で塗られたもので、一種の沈静さが漂っています。奥の山の方に面した窓ガラスを透かして、二つの連なっている峰が見えますが、その横の窓からは一種の神秘さに覆われている古びた渕の水や、麓へとくねった茂竹の林を俯瞰することができます。私は毎日いつもこの楼閣に一人で座り、廻りの闇に包まれるがままに身をまかせて、古風な村の秋の夕暮の長閑さを味わうことが好きでした。窓を開けると、涼し気な風が入り、松葉を焚いた芳香をもたらして来ますが、山の小径には木樵の足音が喬木の上で鳴き交わす烏や鷹の鳴き声にともなって聞こえてきます。こんな雰囲気のなかで私はいつも楽しい気持で二三冊の本を読んでおりました。

卞士明にとって、都市よりも、むしろ田舎の自然こそがかれの空想を最大限に拡げることのできる空間なのであったかもしれない。用件であった墓作りのことも一段落すると、かれはあいた時間を利用して、多くの古蹟があることで知られる杭州郊外の有名な古庵を尋ねようと思い立った。そこでふと白衣の女性を見かけ、いっそうこれまで抑制されてきたかれの空想を掻き立てた。

私の乗った舟が古庵の門前に着いたとき、ちょうどもう一隻の小舟がこっちに向かって来ました。その小舟とすれ違った際に、その舟の後部に白衣を着た一人の女性の姿が私の眼に映りました。彼女はおそらくどこかから遊びに来た

ものか、あるいは地元の娼婦だろうと思いながらも、私はその姿を見た瞬間、電撃を受けたかのような感じが身体に走りました。

租界上海とまったく異質な空間（景観）には、この読書好きで、孤独を愛する青年が一種、女性恐怖症ともいうべき症状に陥っている。「上海では、女性に強く誘惑された経験はまだ一度も味わったことがありませんでした」とかれの述懐する言葉は、一面では真実であったろう。しかし、都市のなかで抑制してきた精神のもう一面がすでに歪んだかたちで、内面に沈潜していたことに卞士明は気づいていない。そのため、卞士明は、古庵の前で「白衣を着た一人の女性」をみた瞬間、なぜ「電撃を受けたかのような感じ」がその身体をつらぬいたのか、自分でもわからなかった。[8] このちょっとした出来事がかれの深層心理のゆがみを表面化させるきっかけとなって、だんだん広げてゆく。

私はそれを欲情が理性に背いて現われたとは認めたくありません。また、その女性の顔とスタイルがとびきりの美人だったとも思いません。だから、自分の心がその一瞬間だけ確かに動揺したのだと認めますが、それはほんの一瞬の動揺にすぎず、それ以上のなにものでもなかったろうと思います。まして今や、夕日の沈みかけた水郷からは何も欲情の刺激も感じられませんから、その時のことはすべて自分の眼のせいだと思い、上海に帰ったら、すぐに眼の診察を受けようと思っていました。

ここでは、かれは自分が感じた心理的ショックを「欲情」によってであることをただちに否定する。それというのも、「今まで、このような女性には上海では毎日、何百人も眼にしてきましたが、一度も彼女たちの姿が心に残るということはなかったからであり、都市での自己抑制の鍛錬から、おそらく女性に対して性的欲望は起こらないと確信していたからである。「その時まで、私は自分の精神の健全さに対して何ら疑問をもっておらず、まったく肉体と同様に健全であったと自信を持っていました」とかれがいっていることからもその自信のほどがわかろう。

当時、私自身も自分のこのような感覚にびっくりしてしまいました。それにしても、その時はただ、それを自分の邪

念のせいだと思いこむようにしました。確かに私はそそれも当たり前のことだろうと思うのです。考えてみれば、一人の女性が身を屈めて蘆の屋根で覆われた小舟に坐っている姿、その媚びを売るような、艶やかさを帯びた姿を見るのは、それまでの私には一度も経験したことがありませんでした。

「邪念」あるいは「猥褻な想念」というかれの言葉からは、そのときの心の動きを道徳的な悪という観念でとらえられていることは重要である。その言葉の背景には、結婚という制度外の性的欲求を道徳的に一種の悪だとみなす観念がある。地方出身で知性も教養もある卞士明にとっての常識は、おそらく伝統にはぐくまれた知性であったろう。その常識からすれば、結婚外の性欲は汚らわしく不徳のきわみと感じられていた。そのような常識が、大都市上海においても、精神の「健全さ」を保とうとして自己抑制をみずからに課してきたのであった。それなのに、故郷の田舎に帰って来るや、どうしてふと行きずりの女性に欲情を感じるようになったのか、卞士明は納得できず、むしろ戸惑っており、ついにそんな心の動きを「自分の眼のせいだ」という原因に帰するところで納得しようとする。それでも、かれの眼に焼きついた白衣の女性は消えることはなかった。そのためにみずからの精神の健全さまでも、疑うようになってしまう。

三、「夜叉」――主人公の精神病跡の表象――

都市における女性拒否の卞士明の姿勢は、田舎で目撃した白衣の女性によって崩されたのだ。これは田舎で逢った女性が都市の女性より魅力的だったというのではない。そのことは上述した卞士明の説明からでもわかる。そうだとすれば、都市におけるかれの精神の「健全さ」はどうして田舎で急に崩れたのか。この点に関しては、もう少し説明を付け加える必要がある。つまり、久しぶりに故郷に帰り、ふと眼にした女性に欲情を感じたその瞬間、卞士明の潜在下に抑圧されてきた性的欲求は、一気に解放する機会が与えられたのであった。が、その欲望が顕在化したとき、それは歪んだかたちをとっていたのである。したがって一旦解放された歪んだ欲情は、みる物ごとに幻影となってかれの眼前に現れるようになったというのである。この解釈はいうまでもなく、フロイト流の精神分析の基礎的解釈にしたがうものである。この解釈がきわめて有効であるとすれば、これは読者の側の視座というよりも、作家自身が主人公の心理過程を記述する方法論で

あったことを証明しよう。

しかし、その夜、こんな精神状態ではなかなか寝付けなかったので、卞士明は煙草を吹かしながら、何気なしに本を開いて暇を潰そうとしていると、偶然にもその本のなかに「夜叉」に関する記述がかれの眼に飛び込んできた。それは、

いま自分が泊まっている村の付近の、林木が茂った高い山に、百年前に一人の夜叉が現れた。その魔物はいつも夕方頃になると、綺麗な婦人に幻化して、麓にある墓の入口の側に座って、啜ったり泣いたりしてその側を通り過ぎる農夫や木樵を誘惑する。最もひどいときには、付近の村は、毎晩きまって誰かが食われるが、朝になると、夜叉に食べ残されたその白骨だけが村人の眼に止まるのだった。

というものであった。その記述を読んだ卞士明は、やがて昼間みた白衣の女性とむすびつけて連想するようになってしまう。「なにかを企んだような邪気を浮かべた顔をし、男を誘惑する悪魔のような眼をしている彼女（白衣の女性）は、きっと夜叉の変身にちがいない」というのは、その箇所の一つである。そう思うと、かれは思わず何とも言えない恐怖感に襲われ、たちまち不安になってくる。こうして、今日たまたま出会った白衣の女性は、確かに夜叉の化身にちがいないと思い込むようになる。この卞士明の心理の動きは、自己の病理を他者の悪に転化する典型的な精神病者の症状の一つである。こうして、眼にとめてある書物に記されている「夜叉」の記述を読むことで、かれの幻想はいっそう激しくなり、みずからの幻影に浮かぶ白衣の女性がもしかすると夜叉ではなかろうかと幻想する。

卞士明は考えれば考えるほど、ますますそう信じ込んでしまい、それまでまったく頑健であった身体も少しだるさを感じるようになる。「私ははじめて自分が神経衰弱にかかったことがわかった」とかれはいう。このように述懐する卞士明の認識には、都市の近代化に伴って生じた都市と田舎の文化的なギャップが認められる。つまり、大都市上海に来た卞士明が眼にしたものは、性そのものも商品化されるような、なにもかもが商品となって氾濫する消費文化であった。このような文化は、地方の村里のなかでは厳然として存在する儒教道徳とは、まったく相容れられないものといってよい。それゆえにこそ、伝統的知性の持ち主である、青年卞士明にとっては、都市文化から防御するかのように、自己抑制をすることが義務づけられる。すべてが商品化され、金銭によって交換される都市においては、公娼制度の存在と、その周囲に無

数の私娼の群も黙認されているために、性的欲望といえども、売買されることは変わらない。このような租界都市上海において、卞士明が伝統的倫理と教養から、性的欲望を意識の潜在下に抑圧してきたのも必然であったろう。ただし、その抑圧がみずからの性的欲望をまったくなくしたというよりも、それが歪められて潜在化されていたことにはかれは気づかないでいた。だから、かれはそれをみずからの身体の不調（「神経衰弱」）に帰しようとする。[9]

小説はここから、白衣の女性に対する卞士明の過度に反応する精神的躁鬱状態が引き起こす殺人事件を、かれ自身の視点をとおして描いてゆく。しかもその殺人は、かれの知性に媒介されて、故郷の山水やその土地の民俗にひそむ「夜叉」の伝承とからんで展開されることになる。ある日の夜、気晴らしにまた散策に出かけた卞士明は、村道のはずれで「白く」輝くようなものを見かける。最初、「白く輝くようなその影」はおそらく卞士明の告白のとおり、一匹の兎にすぎなかったかもしれない。しかし、白い輝き――白衣の女性――夜叉といったような異常な連想を信じ込んでしまっていた卞士明からすれば、なにか白い物が眼に入ると、それは必ず夜叉の化身にちがいないと思い込むようになっていた。夜叉の化身と信じた兎の跡を追っているうちに、卞士明は不意に逢い引きのために村のはずれに出てきていた一人の白衣の女性を見かけることになる。そのため、前述のごとき観念連合にとりつかれているかれの脳裏にひらめいたのは、次のような考えだった。

> この女性はきっと、一世紀このかた殺されずに生き残っている夜叉にちがいありません。この夜叉は最初、船中の女に変身したり、古庵の近くで飛ぶ鳥に化けたりしたのですが、さらには兎に変身して私をここまで誘惑して来たのです。今度、この白衣の婦人もきっとその魔物の変身にちがいあるまい。

そう考えつくと、かれはその白衣の女性の跡をひそかに追いかけはじめた。しかし、白衣を着た女性は村里に住む若い農婦であった。彼女は卞士明に付けられていることに気がついていない。こうして二人が山の麓の墓地にたどり着いたとき、かれは若い農婦に迫った。それは欲情のために強姦しようとしたのか、それとも殺意をもって襲ったのかはわからない。農婦は身を守ろうと無言のまま必死にあらがった。しかし、その行為が夜叉の攻撃だと、卞士明の確信を一層強めさせてしまい、ついにこの女性を殺害してしまった。あとになってのかれの告白によれば、その白衣の若い農婦は唖の女で

あった。

卞士明からすれば、若い農婦を殺害したのは、すでに言及した異常な連想からする白衣を身にまとった魔物の夜叉を殺した、という正義の行為であった。しかし、その行為は、精神分析学からすれば、抑圧されているうちに歪められた性的欲求の倒錯による衝動的な狂気殺人だった。そのことは次のような告白からうかがえる。この若い農婦の姿を見かけたとき、一瞬女性は卞士明のほうを振り向いた。そのとき、かれは夜叉が立ち止まって、こっちを向いて微笑したと思いこんだ。その次はおそらく自分を喰うであろうと思いながらも、

私の心には急にある非条理な欲望が浮かび上がりました。私は古代の怪奇小説に記述されていることを経験しようと思ったのです。というのは、私は人類の恋愛領域を広げようと覚悟したからです。私はこの不自然な出会いから自然なかたちでの美女との恋愛を求めようとしました。

と思い詰め、それにこの夜叉の化身である美女に喰い殺されるにちがいないと承知しながらも、美女との恋に身をゆだねようと覚悟したのであった。[10]

白衣の農婦を殺した卞士明はみずからが犯したこの罪におびえ、あわてて故郷を離れ上海に逃げ帰ろうとした。しかし、夜叉の幻影は絶えずかれに付きまとってしまっている。上海行きの列車のなかで、偶然「私」の親戚の女性と乗り合わせた卞士明は、彼女の白い服装に何気なく眼をとめたときにも、かれの心は夜叉の幻影に恐れとときめきをおぼえている。次の引用はすなわち、そのときの場面描写である。

私は一刻も休まず、急いで町の駅に向かって行きました。私はすぐに上海行きの列車に飛び乗ろうと思っていました。それでも私は人殺しの罪を犯したこの両手をどこに置いても、いつもあの女性の恐しい頭を抱えているような気がしました。周囲の人々が私を見る眼はすべて探偵のように見えました。もしかしたら、かれらは私の顔から昨夜私が犯した殺人の罪を読みとっていたのかもしれません。私は帽子を眉のところまで低く引っ張って被っていました。私は頭を上げる勇気までも失っていました。切符を買って私はすぐ改札口からプラットホームに向かっていました。とこ

ろが切符を改札係に出すためにやむをえず頭を上げたとき、思いがけずプラットホームに立っている一人の女性、あの時舟中に乗った白衣の女性の姿が眼に飛び込んできました。彼女はきっと魔法使いにちがいありません。だからこそ、その幻影をもって人々を殺人の犯罪者になるまで誘って来るのです。こう思うと、私はなるべく彼女から離れて、彼女の眼を避けるように気をつけていました。

しかし、そこでは何事も起らず、そのときはそれだけだった。そしてふたたび上海で暮らすようになったかれは、ある日、デパートメントストアに買い物に出かけたが、そのときにも、偶然白い服を着た女性を見かけることがあって、その心はいっそう恐れとときめきをおぼえた。

こうして、上海に戻る途中、また帰ったあとの都市のなかでも何度も白衣の女性に出会ったことによって、夜叉への恐怖がますますかれの脳裏に刻み込まれてしまった。この精神的脅迫感に耐えられず、友人の家に出かけて行った卞士明は、そこで白衣を着ている友人の姪を眼にするや否や、ついに激しい精神錯乱を起こして、その場に昏倒してしまった。友人の介護でかれは病院に収容された。ここでやっとかれの告白は小説の冒頭部とつながり、終わることになる。

四、「白衣の女性」——女性拒否から都市拒否へ——

前節まで小説「夜叉」の内容をふまえながら、主人公の殺人に至るまでの精神病理の発症過程を追究してきた。このようにみてくると、主人公の病理の過程において、「白衣の女性」が重要な役割を与えられていることがうかがえよう。それでは、「白衣の女性」の役割とは何であろうか。本節では、そのイメージを「白衣」＝白色と「女性」に分け、それが租界都市上海の都市表象の記号として用いられていることをあきらかにし、さらにそれが小説のなかでどのように機能しているのかに考察を加えてゆこう。

まず、あらためて「白衣の女性」によって惹き起こされる主人公卞士明の精神病理の過程を要約すると、次のようになろう。すなわち、夜叉の幻影におびえる卞士明の精神世界をかたち作ったのは、最初に見た白衣の女性の観光客が契機となっていた。この白衣の女性によって、それまで自己抑制してきた卞士明の女性への歪んだ情念が、一気に解放された。

しかし、田舎の農婦を眼にした時点から、白衣の女性がかれの性欲をそそる対象から、その存在を威嚇する対象へと転化してくる。かれは田舎の若い農婦を殺害するのも、その歪んだ情念によって精神に錯乱を来したからである。つまり、主人公は、性的倒錯による女性への憎悪から、結果として白衣の女性を殺してしまったわけである。そのため、卞士明は、この小説の結末で語り手の「私」の姪（彼女も白衣の姿をしている）を眼にしたとき、良心の苛責から、その姪が自分の罪を暴こうとする裁判官として来た夜叉であるかのようにみえて、昏倒したのであった。

「古代の怪奇小説に記述され」た夜叉のイメージは、女性誘惑と女性憎悪といった相反する二つの情念をないまぜにした対象と信じ込んだ卞士明の、狂的精神状況を見事に象徴している。白衣の女性のイメージはまるで通奏底音のごとく次々と筋立てにあらわれ、主人公の病理進行の過程にむすびつけて描かれてゆく。その進行に伴って、主人公の狂的病跡が性的倒錯から強度のノイローゼへ、そしてそれが嵩じた極限に、行きずりの衝動殺人へと変わりつつあるように、精神分析学の知識にしたがって精緻に追究されている。

「白衣」、というよりもむしろ白色、と都市上海のと関連は、ひとまずあとに譲ることにし、ここではとりあえず、女性と都市との関係をみておこう。その関係は作品内容の紹介のところで触れたように、両者の間はともに拒絶すべきものとして同一視されている。つまり、すべてが商品化され、金銭によって交換される都市にあっては、売春婦の群そのものも性を商品として男性に売りつける存在であった。租界都市上海に住むようになり、街に立ち並ぶ売春婦を多く眼にした卞士明にとっては、都市の腐敗と堕落はそのような女性とむすびついて思われる。伝統的な倫理と教養から自己の心身の「健全さ」を守るために自己防御の措置をとり、この姿勢によって卞士明はかえって、田舎での狂気に導かれる。田舎に帰って、心身のくつろぎをおぼえたとき、その性的欲望はひそかに解放される。[11] 西湖の古庵で白衣の女性を眼にする際、解放された性的欲望はついに噴出したのであった。このようにとらえられるとすれば、白衣の女性のイメージは、都市上海における売春婦の群れと主人公の自己抑制を介して、都市とむすびつけられていたといってよかろう。小説「夜叉」において田舎の田園から都市上海まで連続して代わる代わるに現れてくる白衣の女性の姿は、まさにこのような役割を担っているといえる。

卞士明の意識には、女性＝都市というイメージ連想が一貫している。しかし、都市生活につねに違和感をおぼえていたかれは、その連想を意識下に沈潜させ、それを「自己抑制」の美徳と信じ、心身の「健全さ」を自慢するほどであったの

だが、それが田舎の田園にふれることで一挙に解放され、結局のところ、精神の崩壊をもたらしてしまったわけである。このような経緯によっても、かれが狂気に走ってしまった原因は、都市上海での女性拒否の姿勢に求めることが出来よう。みたとおり、主人公の告白にみられる場面設定は、杭州郊外の故郷からはじまっている。このような設定は、主人公の病理をとおして都市表象を背後に暗示させようとする手法と一致している。主人公卞士明の眼に映る幻影からは、都市における「健全さ」を求めての自己抑制、というよりも、自己閉塞の状況がいかにその精神をむしばんでいるかがわかり、この都市の病理を描き出すのは「夜叉」といった小説の仕掛けである。

卞士明が狂気に走る様相は、都市上海の後景化されている田舎でクローズアップされている。このような方法によって、自己抑制を精神の「健全さ」と信じ切っている、都市生活者の悲劇がかえっていっそう鮮明に浮き彫りにされている。「夜叉」において、田園としての田舎は、つねに租界都市上海の不毛性と対照しながら描かれているのも、このためである。つまり、卞士明にとっての田舎は、たんに都市で疲れ切った肉体をくつろがす土地という意味にとどまらず、またその精神を育み、いつでも寄託することのできる空間である。墓守の親戚との関係をとおして感じられる田舎の濃密な人間関係、それに古びた渕や竹林などの風景を語るかれの眼差からは、古典の世界に導かれる一人の伝統的な中国知識人のイメージが浮かび上がってくる。したがって、その田舎のなかでとらえられる主人公の調和性は、都市でのかれの不安定な状況、すなわち不調和性（違和感）をも同時に暗示させてくれるのである。

「上海にいるとき、こんな静かな田舎の原始の風景を楽しむ機会はどこにもなかった」と、心をなごませる卞士明の言葉には、空と湖の青、田や林の緑こそがかれの精神を癒すものである、というような意味合いが読みとれる。しかも、かれの発話のなかの「原始（の風景）」という言葉には、あきらかに「近代（都市上海）」が意識されていることにも注意する必要があろう。それでは都市上海の色彩イメージは何であろうか。それはいうまでもなく「白衣の女性」の白色というイメージのもつ記号性とみてよかろう。以下ではすでにふれた白衣＝白色と都市表象の関係に関して考察を加えてみる。

「夜叉」において、主人公卞士明とはまったく関係を持たない三人の女性の登場人物は、ともに身につけていた白衣によって、かれの眼に混同されてみられる。その姿はさらに夜叉の伝説とない交ぜして、卞士明の意識の奥で浸ってゆく。当時、中国の江南地方あたりでは、気温が高いため、白衣を着て暑さをしのぐ女性の姿が多くみられる。租界都市上海といえども変わらない以上、白色の衣裳はその当時、流行の服装の色調となっていたとみてよかろう。それゆえに、古庵で

見かけた貴婦人まがいの女性（おそらく都市からの観光客）と列車で見かけた語り手の「私」の姪も、その色の服を着ていたと考えられる。「白衣」という設定の根拠はこうした社会文化によってであろう。[12]

ただし、田舎の女性の姿は、普段着かどうかは、はっきり判明できない。もしかすると、その「白衣」は喪服であることもあり得る。中国の伝統社会では、夫に死なれた女性（寡婦）が白衣を身にまとうからである。小説において、「夜叉」のイメージはまさにそのような女性のように捉えられる。前引の小説の記述に見る、「墓の入口の側に座って泣いたり啜ったり」して、農夫を誘惑する夜叉の白色の扮装は、間違いなく夫に死なれた田舎の農婦の姿をまねたものであった。性欲倒錯に陥った卞士明の意識が、この伝説に深くむすびついているところからすれば、かれの眼に映る田舎の農婦の姿に白衣を媒介として、夜叉のイメージが覆っていったわけである。

このような当時都市上海の女性の流行（風俗）とは別に、白色と都市表象のむすびつきは、語り手の「私」が病院で受けた色彩感覚からもとらえられる。友人の「私」が卞士明を見舞いに病院を訪れたとき、眼に映った病院内の壁や服装や医療器具は何もかも真っ白であった。そのとき、「私」は強烈な苛立しさを感じ、すぐにポケットから青色の縞の入ったハンカチをとり出し、その色をみることによって、苛立った神経を鎮めようとする、といった何気ない描写は小説の冒頭でみられる。ここに見る白色が神経に刺激的であって、青色が神経を鎮めるといった知識はいうまでもなく、フロイト流の精神分析学によったとみてよいが、それより、「私」の行為と感覚が、人間の心理に与える白色の刺戟的効果を示すとともに、その白色が近代都市の粋ともいえる病院とむすびつけて表象されていることは重要視すべきであろう。つまり、小説の冒頭部において、病院のイメージを介して白色と都市がむすびつけられているということは、いわばあらかじめ読者の心理に一定の観念結合を植え付けたことにもなる。読者はこの小説を読み進めてゆくうちに、白色のイメージが表象されるたびに、無意識のうちに都市上海を想起させられてゆく。

こうして、小説「夜叉」では、都市＝女性、都市＝白色を通路として、都市―女性―精神病といったイメージ連合の展開のなかで主題が形成されてゆく。換言すれば、都市への欲望と憎悪にむすびついた白色の女性は、いかに卞士明の精神の深層をむしばんでいったか、ということがこのような描写をとおして示されているのである。ここではそのうちの二箇所をあげてみよう。

それ以来、私は何を見てもすべてその女性の幻影と交錯するようになってしまいました。古庵の唐寅の画を見ても、その落葉の散る木の背後にひとつの寺の建物が見え、その女性がまさにそこに白く光って立っているのです。倪雲林の画を見ても、その小山を埋める笹竹の隙間にまたあの白衣の女性が竹に依り添うようにしてしばらく休んでいる姿がぼんやりと見えるのです。

「唐寅の画」や「倪雲林の画」などは、いずれも中国の古典文人画として有名なものだが、[13] このような名画の構図のなかにも白衣の女性が侵入してくる。このようなことからは、卞士明の精神的病理がいかに深刻なのかはうかがえる。白衣の女性は卞士明の性的欲望の対象となる一方、またみずからを威嚇する具象としても感じられている。その威嚇はあきらかにかれの女性恐怖症と密接に関わっているとともに、いまひとつ、都市への反撥・拒否が投影されていよう。この意味では、白色は卞士明という青年にとって、女性に対する恐怖のメタファーであると同時に、都市上海への拒否のそれでもあったと考えられる。

こうした卞士明の精神病理の構造は、次の引用にも読みとれる。

それ以来、私はなるべく自分の頭にこびり付いた猥褻な想念を嘲笑したり、叱責したりして、その女性の姿を頭からふり払おうとしましたが、どうしてもふり払うことはできませんでした。小庵の侍童がお茶を入れてくれて、私を水閣へ案内して蘆の花を見せてくれたとき、ついに、そこにある蘆の花の草むらすべてがあの白衣の女性に化して私の眼前でなびき揺れていると感じてしまいました。その瞬間、私は一種の、どうにも抵抗できない憂鬱に陥りました。

白い「蘆の花」が白衣のイメージと重なってくることは、自己抑制されていた主人公の意識下の欲望が噴出されてきたことを象徴する。その反動として田舎の白衣の女性の観光客の姿態から、「抵抗できない」強い誘惑を感じている。したがって、かれの眼に映る白い「蘆の花」は、その潜在下の性的欲望をも象徴する。「なびき揺れている」白い蘆花のイメージは、やがて白衣の女性へと変容してゆくうちに、自己抑制が解放される卞士明は、知らず知らずのうちにその潜在下

の性的欲望を釈放し、女性拒否の姿勢から、女性願望へと転化して狂気殺人に走る。

こうして、この小説において白色と女性は、卞士明の存在の威嚇としてイメージされていることが指摘できる。また、それは小説のプロットに随所に盛り込まれ、読者の読みをみちびいているのである。そうだとすれば、作者はこの白色と女性をとおして、なにを語ろうとするのかといえば、それはあきらかに都市そのものだと考えられる。白色と女性の威嚇はすなわち、都市からの威嚇である、そのような白色のイメージの連鎖をとおして、狂気という都市の病理は表象されており、読者の感性に訴えつづけている。

五、むすび

以上で、施蟄存の「夜叉」という小説における狂気の発症およびその意味をとらえてきた。その考察にあたっては、なるべくこの小説と施蟄存の他の精神分析小説との関連にも留意しておいた。ただし、狂気による殺人という結末は、それまでの施蟄存の小説にはなかった設定であった。施蟄存の精神分析小説は、従来、オーストリアの小説家シュニッツラーに影響されたものと評価されてきたが[14]、本章では他の小説はともかくも、この「夜叉」という小説に限っていえば、ほぼ同時代の「橋」の影響も認められると主張するものである。その理由は三つある。

第一には、「はじめに」で指摘しておいたように、「夜叉」を執筆するにあたって、池谷信三郎の「橋」はすでに施蟄存の友人劉吶鷗によって翻訳された。施蟄存がその中国語訳を読んだ蓋然性はきわめて大きかったこと。第二には、両者の作品内容は、これまで考察してきたごとく、一見まったく異なっているようにみえるのだが、作品の深層の構造において、都市―女性―精神病といったイメージの連合において深い共通性がみとめられること。ただし「夜叉」のほうには都市―白色というフロイト流の色彩の心理学が加上されている点は、施蟄存の新たな追求として認められよう。そして第三に、登場人物の精神病の発症や衝動殺人などは、ともに都市の病理としてとらえられ、それに従うプロットの展開にも共通性がみとめられること。

池谷信三郎「橋」と施蟄存「夜叉」といった両作品からは、一九二〇年代から三〇年代にかけての、日本と中国のモダニズム文学の連動がうかがえる。都市の成長・成熟にともなう人間存在――というよりも、都市居住者の存在性――の問

題に、近代文学の新たな主題と表現方法を求めることは、両作家の共通した志向である。このような共通点が認められる一方、両作品には決定的な差異があることも見逃すべきではあるまい。つまり、施蟄存の「夜叉」にみられる「健全さ」への眼差しである。

「夜叉」の冒頭をあらためて見てみよう。田舎から都市に出て来た青年卞士明は、都市生活を送りながら、スポーツをとおして心身の「健全さ」を維持しようとつとめてきたと友人に告白している。「毎日運動場でスポーツをやる」かれにとっては、事務仕事の余暇、デートに出かける都市青年の行動パターンは、不健全なものとして映ったようである。そのためかえってまわりからは、女性と付き合おうともしないかれの行動をいぶかられる。そんな周囲の眼を気にすることは、あるいはかれを運動場に追いやったのかもしれない。その意味で、かれが「まわりの仲間が失恋する」のをみて嘲るのも、一種の自己防御であるといってよい。こうした行動の結果、かれは「身体は普通の人以上に頑丈であった」代わりに、その精神は次第に病んでいったのであった。

主人公の都市での生活ぶりが、以後筋立の展開の主要な動機となっていったことは、本稿で述べたとおりである。しかし、この動機としての心身の「健全さ」という問題が、一九三〇年代の租界都市上海における社会現象と深くむすびついている。このことは、作家劉吶鷗の「礼儀と衛生」においてもみとめられる。そこで、登場人物の「健全さ」、あるいは「衛生」という意識には、なんの意味が隠されたか、ここでは細かく論証は展開しないことにするが、ただ一言でおさえておくことにする。つまり、都市上海における異性間交遊でも、売春婦との性交渉でも、ともに当時、社会的問題として議論されている。この問題は、たんに梅毒による中国人の身体への破壊にとどまらず、さらに植民地の現状と連動して中華民族の危機意識として重要視されている。この点からすれば、施蟄存の「夜叉」や劉吶鷗の「礼儀と衛生」などは、池谷信三郎の「橋」にみる私小説のような性格と異なり、より社会性が強かった作品であるといってよく、その「健全」「衛生」といった意識の底には、民族危機の警鐘がひそかに響いているかのように聞こえよう。

注

(1) 施蟄存は一九〇五年一二月三日、杭州に生まれ。二歳のときから、両親にしたがって蘇州や松江に転々したが、のちに松江に定住するよう

になる。かれが小説創作に興味をおぼえたのは、一六歳のときである。この年、新たな方針にしたがって革新された『小説月報』は多くの青年の文学志願を呼び起こした。施蟄存の処女作「名誉を回復する夢」(原題「恢復名誉之夢」)はすなわちこの直後に書かれたものであった。ただし、このとき、都市文学はまだ「鴛鴦胡蝶派」によって支配された時代であって、施蟄存の処女作も最初はこの一派の雑誌『礼拝六』に載せられたものである。一八歳のとき、施蟄存が短編小説集『江干集』を自費出版し、この間、上海大学に在学しているかれは、同大学で教員を担任している茅盾から、いろいろ文学の話をうかがっていた。一九二八年、小説「娟子」が新文学雑誌『小説月報』に発表され、この作品は施蟄存が新文学運動に投身する記しとなっているものであった。同年の春、施蟄存は劉呐鷗や戴望舒、杜衡などと一緒に雑誌『文学工場』を編集し、同誌は左翼の傾向が強いという理由で強制的に廃刊させられた。九月、かれらはあらたに半月刊『無軌列車』を創刊し、施蟄存は安華のペンネームで小説や詩歌などを発表した。この雑誌も年末に左翼的傾向によって当局から出版停止と命令された。翌年、『無軌列車』の継続誌として創刊されたのは『新文芸』であったが、創刊号に施蟄存の代表作「鳩摩羅什」以外に、劉呐鷗の「礼儀と衛生」も掲載された。一九三二年三月、上海事変や中国国内の政治事情などの影響で多くの文学雑誌が休刊を迫られる状態で、現代書局は大型文学雑誌『現代』を企画し、施蟄存は現代書局の張静廬の招きで、この一九三〇年代、中国の近代文学史上で重要な位置を占めている雑誌の編集長を担当するようになった。本稿でとりあげた「夜叉」はすなわち、かれがこの雑誌の編集を担当し始めた時期に書いたものであった。

(2) 「鳩摩羅什」、一九二九年九月『新文芸』創刊号に掲載。「将軍の頭」、一九三〇年『小説月報』第二一巻第一〇号に掲載。

(3) 施蟄存「致載望舒函十四通」、孔另境編『現代作家書簡』(生活書店、一九三六年)一一〇頁、一二二—一二三頁。

(4) 拙稿「近代における都市と精神病—池谷信三郎の「橋」とその周辺—」(筑波大学文化批評研究会編『植民地主義とアジアの表象』、一九九九年三月)

(5) 施蟄存の小説のうち、「詩人」をはじめとして、「在巴黎大戯院」「魔道」および本稿でとりあげた「夜叉」などはすべて、登場人物の病理的な心理、精神状態に着目してその様相をとらえようとしたものである。楼適夷「施蟄存的新感覚主義」を参照(『文芸新聞』一九三一年一〇月二六日)。

(6) 施蟄存にとって、蘇州と上海の間にある松江県は、たんに実家の所在地だけではなく、また創作の題材の源でもある。大学時代からずっとこの松江県の中学校で教員を担当している施蟄存は、その時期の生活体験から取材して多くの小説を書いた。このような状態は、かれが雑誌『現代』の編集長になった時点まで続いていた。

(7) 本稿で引用した「夜叉」の日本語訳はすべて筆者によるものである。

(8) 小説の叙述によると、この古庵が杭州の一つの名勝であることは『西溪志』にも記されている。そこには、女性の信者が多く訪れてきたようであり、唐寅、倪雲林などの中国古代の文人画も蔵しているという。

(9) 潘光旦『優生概論』を参照(『民国叢書』第一編第二〇巻所収。上海書店復刻版、一九八九年)二五四~二五九頁。

(10) 「夜叉」や「鬼」との恋愛を描いている小説は、一九三〇年代の上海文壇では、一時期かなり流行っていたようである。本稿でとりあげた「夜叉」以外に、葉霊鳳の「落雁」や徐訏の「鬼恋」もその典型としてあげられる。

(11) 一九三二年一月七日、『申報』にはかつて読者からの「新しい上海とは何か」といった投書が載せられていた。そのなかには、「衛生的な上海を建設せよ」が第一項にあげられている(『申報』、一九三二年一月七日「本埠増刊」)。

(12) 「白色」を精神分析学の視点からとらえる場合、「差異化されていないもの。超越的な完全さ、単純性」との意味はまずあげられる。また、「光」「太陽」「空気」「啓蒙」「純粋」「無垢」「貞節」「神聖さ」「購い」「霊的権威」などの象徴として用いられる。純粋、純潔、あるいは肉に対する霊の勝利はよく白色によって表わされているが、それはオリエントでは喪服として着用され、古代ギリシア・ローマでも、そういうものとして使用された。他に、白は生命と愛、人の埋葬とも結びついている。結婚において白は、古い生に対する死を、そして新しい生への誕生を象徴している。その一方で、死においては、現世を超えた新しい生への誕生を表象している。白い服を着た女性は、また愛・生・死の意味合いをもっている。J.C.COOPER「AN ILLUSTRATED ENCYCLOPAEDIA OF TRADITIONAL SYMBOLS」(1978 Thames and Hudson Ltd.London p.41-42)

(13) 唐寅、明朝中期の画家、文人。倪雲林、元末の画家、文人。二人とも江蘇出身の人。唐寅は豪宕不羈、酒を縦にして生業を事とせず。画を善くし、山水・人物・花草に秀で、殊に美人画に特殊な才能を発揮した。また古文詞・詩歌を工にして白居易の体を倣い、才情を尚んだが、自らその詩文に「江南第一風流才子」と署す。著書に「唐寅集」四巻、「唐寅画譜」三巻がある。倪雲林は元の末、幾もなく兵乱が興る時代に生きて、家財を散じて漁夫野叟と混じり、五湖三江の間を彷徨し、その姿を晦ましていたという。その詩・画・書、ともに善くして、とくに枯淡な趣にあふれた山水画で名高い。「夜叉」の主人公卞士明が、このような文人になることを憧れる人物であるといってもよかろう。

(14) シュニッツラー(Arthur Schnitzler 1862-1931)、オーストリア作家、精神分析学者フロイトの知人であるといわれる。その作品は多く登場人物の心理を精神分析学によってとらえているので、フロイトの学説の文学化といってもよい。施蟄存はこの作家から多く影響を受けていたことに関しては、かれ自身でもみとめられる。施蟄存はかつてシュニッツラーの作品を多く訳出したことがあるが、代表的なものは『多情的寡婦』『薄命的戴麗沙』『愛爾賽小姐』『生之恋』などがあげられる。

追記、この論文は、日本学術振興会外国人特別研究員奨励費の助成を受けて公表するものである。なお、同テーマに関する論考は三部構成となり、本稿はその第二本目に当たる。第一本目「近代における都市と精神病――池谷信三郎の「橋とその周辺――」は、『植民地主義とアジアの表象』(筑波大学文化批評研究会編、一九九九年三月刊行)に収められており、参照されたい。